

幼児期の評価伝染における集団の関係性の効果

奈良教育大学, 次世代教員養成センター 残 華 雅 子

Effects of Group Relationships on Evaluative Contagion in Preschoolers

Teacher Education Center for the Future Generation,

Nara University of Education, ZANKA, Masako

要 約

人が他人に対する評価を拡大し、その人と同集団に所属する他者にも同様の評価を当てはめる傾向を評価伝染という。この評価伝染は幼児期から生じることが示されているが、幼児がその集団内の関係性を考慮して、他者の評価を同集団の他者に拡大しているのかは検討されていない。そのため本研究では、同じ集団に属する2名が友達同士である場合と、初対面である場面を比較し、評価伝染の程度に違いがみられるか検討を行った。実験の結果、集団の関係性による評価伝染に違いはみられなかった。しかし、部分的には条件による選択傾向の違いがみられた。まず、友達同士の場合では信頼性の高いモデルと同集団の他者をチャンスレベルよりも有意に選択するが、初対面条件ではチャンスレベルと選択に違いがみられなかった。ただし、本研究にはサンプル数の少なさ等に課題があり、更に検討を行う必要性が残っている。

【キーワード】 評価伝染, 幼児期, 選択的信頼, 社会集団

Abstract

Evaluative contagion is the tendency to extend an evaluation of someone to their social group associate. Previous research shows that preschoolers also display this behavior, but little is known about whether they consider the type of relationship within the group when doing so. This study examined whether the preschoolers' tendency for evaluative contagion differs based on whether group members are friends or have just met. Experimental results showed no significant difference in evaluative contagion between friends or first-meeting pairs. However, some findings indicated variations in participant choices depending on specific conditions. In some aspects of the friend condition, participants significantly preferred the group associated with the reliable model over the chance level. Nonetheless, this preference was not observed in the first-meeting condition. Limitations of this study include the small sample size, indicating a need for further research.

【Keywords】 evaluative contagion, preschoolers, selective trust, social group

問題と目的

人には、他者に対して生じた特定の評価を、その人と同じ集団に所属する他者に拡大し、同様の評価を当てはめる傾向がある。Olson, Dunham, Dweck, Spelke & Banaji (2008) はこのバイアスを評価伝染 (evaluation contagion) とした。そして、他者に対し、他者が特定の社会的集団に属しているために、否定的な評価を下す可能性があるこの傾向は、偏見や差別的態度の原因になり得るものであると指摘した。

評価伝染のバイアスは児童期や幼児期でもみられることが知られている。例えば Olson, Banaji, Dweck, & Spelke (2006) は、平均年齢 6 歳の参加児に対し、2 人の人物について、一方の人物は運が良かったストーリー、もう一方の人物は運が悪かったストーリーを提示した。実験の結果、参加児は運が良かった人を運が悪かった人よりも好んだ。更に参加児は運のよかった人物と同じ集団に所属していると教示された他者を、運の悪かった人物と同じ集団に所属していると教示された他者よりも好むようになった。つまり、参加児の、運が良かった / 悪かった当事者に対する評価が、その人物と同じ集団の他者にまで拡大され、当事者と同様の評価がなされたのである。また、同様の結果は意図的な行動でも生じ、意図的に善い行いをする人物と同集団の他者を、意図的に悪い行いをする人物と同集団の他者よりも好むようになることも明らかにした。Barth, Bhandari, Garcia, MacDonald, & Chase (2014) は、4, 5 歳児を対象に選択的信頼課題を実施し、評価伝染の傾向を明らかにした。この実験では、子どもにとって馴染みのある対象物 (e.g., コップ) に対して、誤った情報を述べるモデル (e.g., コップに対して、「あひる」と述べる) と、正しい情報を述べるモデル (e.g., コップに対して「コップ」と述べる) を提示した。そして、正しい情報を述べていた人物と同じ集団に所属する他者に対して、誤った情報を述べていた人物と同集団に所属する他者よりも、信頼を示すことを明らかにした。この他にも Skinner, Meltzoff, & Olson (2019) は評価伝染という言葉は用いていないが、4, 5 歳児が、他者から好意的な態度を向けられているモデルと同集団の他者を、否定的な態度を向けられたモデルの同集団の他者よりも選好することを明らかにしている。

以上のことから、幼児期でも評価伝染に基づく他者評価のバイアスは生じると考えられるが、どのような集団であっても、幼児が評価伝染を生じるのか、集団によってその程度は異なるのかは不明瞭である。上記の研究では、様々な集団で評価伝染が生じることが明らかにされてきた。まず Olson et al. (2006) は同じ色のシャツを着用したモデルを複数人提示することで、集団を表現した。また Barth et al. (2014) は研究 1 ではキャラクターの見た目が類似していること、研究 2 では同じ色のシャツを着用したモデルが、同じ玩具の好みを持っていると教示することで集団を提示した。Skinner et al. (2019) は同じ色のシャツの着用と、同じ島に在住しているメンバーだと教示することで集団を示した。このように、さまざまな特性の集団において評価伝染が生じることは示されているが、異なる特性を持つ集団間で評価伝染の程度を比較した研究は行われていない。そのため、集団内の関係性がどのようなものであっても、幼児は画一的に評価伝染を生じるのか、集団内の関係性を考慮した上で、評価伝染を生じるのかは明らかではない。

以上のことから本研究では幼児が他者に対する評価を、その人が所属する集団の他者に当て嵌め

るとき、その集団の関係性を考慮するか検討を行う。本研究では特に同じ集団に所属する 2 名が友達同士である場合と、初対面で友達同士ではない場合を比較することとした。これまでの研究で、幼児は類似性が高いことから、友人関係であると推測することが示されている (Lieberman & Shaw, 2019)。そのため、友人関係である場合に、初対面であるよりも、類似性が高いと判断するのであれば、友人関係の集団に対して、初対面の集団よりも評価伝染を生じると考えられる。なお、本研究は奈良教育大学の人を対象とする研究倫理審査委員会（受付番号 3 - 19）および、びわこ学院大学の研究倫理審査委員会（承認番号びわ学倫 05 - 008）の承認を受け実施した。

方 法

参加者

5 歳クラスの幼児 58 名が参加した ($M=6.16$ 歳, $SD=0.36$ 歳; 男児 32 名, 女児 26 名)。

手続き

実験状況 実験は幼稚園・こども園内の個室にて実施した。実験中は参加者と実験者は机を挟んで椅子に座っていた。

フェーズ 1 タブレット上に青色のパーカーを着た 2 名のモデルと、黄色のパーカーを着た 2 名のモデルを提示した。そして実験者は、「(青色のパーカーを着た 2 名を指しながら)この 2 人は青色チームです」と伝え、「(黄色のパーカーを着た 2 名を指しながら)この 2 人は黄色チームです」と教示し、続けて「今からそれぞれのチームの人が色んな質問に答えていくから、よく覚えておいてください」と教示した。

実験者は参加児にとって馴染みのある物体の写真を提示し、その物体の名前を尋ねた。参加児が回答したらその回答が正しいことを伝えた後、実験者は更に詳しい名前を伝えた。例えば、剪定バサミの写真を提示し、参加児が「ハサミ」と答えた後、実験者はそれが「剪定ばさみ」であることを伝えた。

名前を伝えた後、実験者は「青色（黄色）チームの人も同じ問題に答えるから、なんて答えるか、よく覚えておいてください」と教示をし、青色（黄色）チームのうち 1 名のモデルが回答する場面を提示した。続けて、「次は黄色（青色）チームの人が答えるから、またよく覚えておいてください」と教示をし、黄色（青色）チームのうち 1 名のモデルが回答する場面を提示した。この時、青色チームか黄色チームの一方が、実験者が参加児に伝えた詳細な名前を回答し、もう一方は、明らかに誤った名前を回答した。例えば、剪定ばさみについて、映像上で「これはなんですか」という音声の流れた後、一方は「これは剪定ばさみです」と回答し、もう一方は「これはクレヨンです」と回答した。

一連の流れを対象物を変えながら、3 試行行った。この時、一方のモデルは繰り返し正しい名前を述べ続け、一方のモデルは繰り返し誤った名前を述べ続けた。正しい名前 / 誤った名前を述べるモデルと、回答するモデルの順番はカウンターバランスをとりながら実施した。

確認フェーズ 1 まず参加児に対して、物体の名前を回答していた 2 名のモデルを提示し「物知りなのはどちらでしょうか?」と尋ねた。次に、青色チームの 2 名のモデルを提示し「問題に答えて

いたのはどちらでしょうか」と尋ね、参加児の回答後、続けて、黄色チームの2名のモデルを提示し、同様に尋ねた。

フェーズ2 実験者は「また青色チーム（黄色チーム）の人がお話しするから、しっかり聞いて覚えておいてください」と教示した後、動画を再生した。動画では、「あなた達は友達ですか」という音声 flowed 後、友達条件ではモデル2名が「はい、私たちは一番の友達です」「彼女の言う通りです」と回答する場面を提示した。初対面条件では「いいえ、今日初めて会いました」「彼女の言う通りです」と回答する場面を提示した。この動画を、青色チームと黄色チームの両方でカウンターバランスをとりながら順番に提示した。

確認フェーズ2 実験者はまず青色チームの2名のモデルを提示しながら「この2人はお友達ですか？初めましてですか？」と尋ねた。参加児の回答後、黄色チームの2名を提示しながら、同様に尋ねた。

テストフェーズ 参加児に対し、馴染みのない物体の写真を提示した。そして、タブレット上にフェーズ1で物体の名前を回答していない方の青色チーム・黄色チームのモデルそれぞれ1名を提示しながら、その物体の名前を知っているのはどちらのモデルかを尋ねた。物体を変えながら3試行実施した。

結 果

確認課題を通過した33名（ $M=6.20$ 歳， $SD=0.36$ 歳，男児17名，女児16名）を分析対象児とした。各チーム2名のうち、どちらがフェーズ1で回答していたかを尋ねた結果、黄色チームの確認課題において正解できた参加児は58人中46名であり、12名が不正解であった。一方で、青色チームの確認課題で正解できた参加児は58名中57名であり不正解だったのは1名のみだった。 χ^2 乗検定を行った結果、有意な差がみられ、青色チームの確認課題において正解している参加児が有意に多かった（ $\chi^2=3.90$ ， $p<.05$ ）。このことから黄色チームと青色チームに質的な違いがあることが考えられたため、黄色チームのモデルが一貫して正解していた条件と、青色チームのモデルが一貫して正解していた条件を分けて分析することとした。各条件の人数の内訳を表1に示した。

表1 分析対象児の内訳
信頼性が高いグループ

	青色チーム	黄色チーム
友達	6名 ($M=6.09$ 歳， $SD=0.26$ 歳)	11名 ($M=6.28$ 歳， $SD=0.34$ 歳)
初対面	6名 ($M=6.08$ 歳， $SD=0.42$ 歳)	10名 ($M=6.28$ 歳， $SD=0.42$ 歳)

フェーズ1で正しい情報を述べていたモデルと同集団のモデルをテストフェーズで選択していた回数を従属変数、関係性の条件（友達条件 / 初対面条件）、正しい情報を述べていたチーム（黄色 / 青色）を独立変数とした分散分析を行った。その結果、有意な主効果及び交互作用は見られなかった（関係性, $F(1,32)=0.24, p > .10$, 偏 $\eta^2=0.01$; チーム, $F(1,32)=0.48, p > .10$, 偏 $\eta^2=0.02$; 関係性 $\times$ チーム, $F(1,32)=0.46, p > .10$, 偏 $\eta^2=0.02$)。

次にチャンスレベルとの比較を行うため1標本のウィルコクソン符号順位検定を行った。その結果、正しい情報を述べている集団が青色チームの場合においては、友達条件においてチャンスレベルと有意な差がみられ、正しい情報を述べていたモデルと同集団の他者をチャンスレベルよりも多く選択していた ($V=21, p<.05$)。初対面条件ではチャンスレベルと有意な差は見られなかった ($V=18, p>.10$)。正しい情報を述べている集団が黄色チームの場合においては、友達条件, 初対面条件どちらもチャンスレベルと有意な差がみられ、正しい情報を述べていたモデルと同集団の他者をチャンスレベルよりも多く選択していた (友達条件, $V=59, p<.05$, 初対面条件, $V=52, p<.05$)。

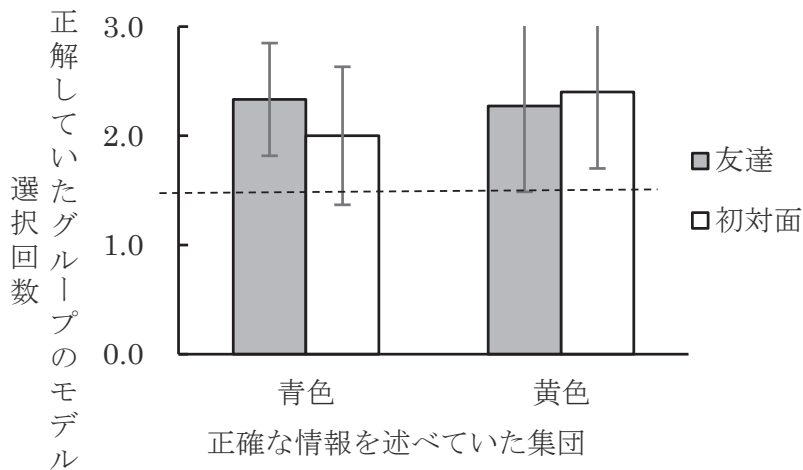


図1 各条件の正確な情報を述べたモデルのチームの選択回数（エラーバーは標準偏差を示す）

考 察

本研究では幼児が他者に対する評価を、その人と同じ集団に所属する他者に当て嵌めるとき、その集団の関係性を考慮するか検討を行うことを目的とした。特に同じ集団に属する2名が友達同士である場合と、初対面であり友達同士ではない場面を比較することとした。

実験の結果、集団の関係性によって、評価伝染の程度に違いはみられなかった。しかしチャンスレベルとの比較を行うと、青色チームが正確な情報を述べている場面においては、友達条件ではチャンスレベルよりも有意に青色チームのモデルを選択した。しかし、初対面条件ではチャンスレベルとの

違いがみられなかった。一方で、黄色チームが正確な情報を述べていた場合には、どちらの条件でもチャンスレベルよりも有意に黄色チームのモデルを選択した。そのため、集団の関係性によって評価伝染の違いに差はなかったが、選択傾向については青色チームが正しい情報を述べていた場合のみ、異なる傾向がみられた。

なぜ正確な情報を述べていた集団によって結果が異なったのかは不明瞭であるが、黄色チームの2名の外見の類似性が高かったことが影響したことが考えられる。本研究においては、各集団の2名のうちどちらが正確な情報を述べていたモデルかについて尋ねる確認課題を行った。そして青色チームについては1名しか不正解者がいなかったが、黄色チームでは12名が誤答であった。このことから、青色チームの2名よりも黄色チームの2名の方が見分けづらかった可能性がある。更に、確認課題は2択であったため、この課題に正解していた参加児の中にも、たまたま正解した参加児が含まれていた可能性がある。そのため、参加児の中には、フェーズ1で正解を答えていた黄色チームのモデルが、テストフェーズでも提示されていると勘違いし、黄色チームのモデルが正確な情報を述べていた場合に、関係性に関わらず、黄色チームのモデルを選択していた可能性がある。また、外見的な類似性が高いことが、関係性に関わらず、評価伝染の影響を高めた可能性も考えられる。

しかし、黄色チームに対し、2人の関係性に関わらず、同程度の信頼性が評価されていたとすると、青色チームが正確な情報を述べていた場合に関係性による違いがみられたことと矛盾が生じる。もし、黄色チームにおいてフェーズ1とテストフェーズで同じ信頼性が評価されていたのであれば、青色チームが正しい情報を述べていた場合には、黄色チームのモデルは信頼性が低いと評価され、青色チームはメンバー間の関係性に関わらず、相対的に信頼性が高く評価されたと考えられる。この点については、本研究のテストフェーズで、新奇物の名前を知っているモデルを尋ねたことが影響している可能性がある。つまり、新奇物の名前を知っていると予想される、信頼性の高いと予想するモデルに注意を向けるため、フェーズ1で正解をしていた集団の関係性の方が、幼児の判断に影響しやすかった可能性がある。ただし、先行研究では、4歳児以降は選択的信頼の課題において、信頼性の低さと高さ両方を手がかりとするという指摘もある (Corriveau, Martin & Harris, 2009)。そのため、今回の実験結果については、他者同士が明確に区別でき、見分けることが容易な課題を行うなどして更に検討する必要性が残っている。

また本研究の課題としてサンプルサイズの少なさが挙げられる。本研究では、正しい情報を述べていた集団を被験者間要因として分析を行った。そのため、特に正確な情報を青色チームが述べている群は、友達条件と初対面条件どちらも各6名ずつと分析対象児が非常に少なくなった。そして本研究では58名に実験を実施したが、すべての確認課題に正解したのは、33名であった。分析対象者が少なくなった要因として、確認課題に通過できない参加者が多く見られたことが挙げられる。そのため、今後はより状況や場面が子どもにとって分かりやすい刺激を作成し、改めて検討を行う必要が残っている。

引用文献

- Barth, H., Bhandari, K., Garcia, J., MacDonald, K., & Chase, E. (2014). Preschoolers trust novel members of accurate speakers' groups and judge them favourably. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 67, 872-883.
- Corriveau, K. H., Meints, K., & Harris, P. L. (2009). Early tracking of informant accuracy and inaccuracy. *British Journal of Developmental Psychology*, 27, 331-342.
- Liberman, Z., & Shaw, A. (2017). Children use partial resource sharing as a cue to friendship. *Journal of Experimental Child Psychology*, 159, 96-109.
- Olson, K. R., Banaji, M. R., Dweck, C. S., & Spelke, E. S. (2006). Children's biased evaluations of lucky versus unlucky people and their social groups. *Psychological Science*, 17, 845.
- Olson, K. R., Dunham, Y., Dweck, C. S., Spelke, E. S., & Banaji, M. R. (2008). Judgments of the lucky across development and culture. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, 757.
- Skinner, A. L., Meltzoff, A. N., & Olson, K. R. (2017). "Catching" social bias: Exposure to biased nonverbal signals creates social biases in preschool children. *Psychological Science*, 28, 216-224.

謝 辞

研究実施にご協力いただいたお子様、保護者の皆様、奈良教育大学附属幼稚園（現こども園）、びわこ学院大学附属こども園あつぷるに感謝申し上げます。また、本研究実施にあたり、ご支援を賜りました公益財団法人発達科学研究教育センターに感謝申し上げます。